無限の玄

初出　「早稲田文学増刊　女性号」、二〇一七年、早稲田文学会

月夜野（つきよの）で死んだ。

ここ最近の本人の様子、あるいは現時点の状況で何か不審に感じることはあるかと刑事に聞かれたとき、まずそのことが浮かんだ。家というものを嫌うあまり放浪生活を続けた父が、それでも唯一「帰る」と表現できる場所、どこにいても六月には必ず戻る生家で死ぬというのは、どうも感傷的すぎる気がした。それも、父一人が予定より五日も早く月夜野入りしたのだ。まるで死期を悟って死にに帰ったかのようだが、その手の望郷は父に限ってあり得なかった。

刑事には、しかし、結局そうは言わなかった。本田という名のその刑事は、兄と同じ三十代半ばと思しき年頃の男で、リビング中央に倒れた父の体をざっと調べ、縁側の隅に転がっていたロックグラスを拾い上げると、滑って頭を強打したか脳卒中を起こしたのだろうと言った。検視官は死後二日経っていると見積もった。

リビングのソファに兄と僕と千尋を横並びに座らせると、本田は向かいに一人だけで腰を下ろして、必要な手順なのでと断ってから事情聴取を始めた。誰かに電話をかけながら二階へ向かう叔父のことは、ちょっと目で追っただけで逃がした。

あらためてお悔やみの言葉を述べてから、「おいくつですか？」と本田はまず言った。

「二十八だ」千尋がすぐにそう答え、「六十三だ」と踏みつけるように兄が答え直した。

二人のあいだで曖昧な笑みを浮かべた僕に、本田は鋭い一瞥をくれ、「ご病気などは？」

さあ、と兄は硬い声で返した。「何かあったのかもしれないけど、本人も知らなかったと思う。具合が悪くても黙ってるか、自分でも気付かないタイプだったから」

「お父さんはお一人で？」

「おひとり？」不意に、声がいきり立った。いや、としかしすぐに静まって、「一人じゃない。いつも俺たちと一緒だった」と兄は答えた。「この家はもともと俺たちの爺さんの家で、今は親父と、叔父と、俺たちの五人で住んでるんだ。住んでる、というか年に一度、こうして帰るだけだけど。というのは、爺さんが若い頃に始めたブルーグラスバンドを家族みんなで引き継いでて——ブルーグラスって、カントリーミュージックに似てる、古臭い音楽なんだけど——それが野外演奏中心で、全国あちこち回ってるもんで、この家にいるのは毎年だいたいこの時

期だけなんだ。六月いっぱい、長いときは七月の半ばまでここで休んで、夏になったらまた次のツアーに出る。繰り返しだよ」そこで兄はふと気付いて、自分が死んだ玄(げん)の長男の律(りつ)で、僕が次男の桂(けい)、千尋は叔父の喬(たかし)の息子だと説明した。

本田は頷き、質問を続けた。「今回、お父さんだけ先に戻られたのは？」

「たまたまとしか言えない。ライブスケジュールは消化してたから、バンドとしてはもう帰るだけだった。でも俺と弟たちは横浜のラジオ局に呼んでもらってたし、叔父も都内で人と会う約束があった。叔父は別で作曲の仕事もやってるんで、その関係で。だから親父だけ先に、新宿からバスで帰ったんだ。俺たちより……」

兄を見つめる本田を見つめ、僕は呟いた。「五日早く」

「五日早く」視界の左端で、兄は頷いた。「車のエアコンが壊れてからずっとイラついてたし、俺たちの予定に振り回されるのも気に入らなかったんだと思う。疲れてたんだろうな」

本田は何やら手帳に書き留めながら、「そのとき、何か様子がおかしいと感じました？」

「様子は常におかしかったよ、そのときに限らず」僕と千尋はそこで儀礼的に笑ったが、「今の質問がもし、自殺の線も考えてるって意味なら――」と兄は表情を変えずに続けた。「探るだけ無駄だと思いますよ。うちの親父は自殺するほど感傷的にはなれない。その点に関しちゃ

病気だったと断言できるな。アレルギー体質だったんだよ」足を組み、兄は初めて刑事に笑いかけた。「玄がアレルギーを起こすのはこの三つだ。センチメンタリズム、ロマンティシズム、それからノスタルジー」

僕と同じ違和感を、兄も抱いていたのかもしれない。その思いは、しかし安堵ではなく漠然とした不安に通じた。うつむくと、右隣に座る千尋の左手が目に入った。膝の上に投げ出されたその手の、黒い梵字の彫られた指が、一瞬、震えたように見えた。

顔を上げると、いきなり本田と目が合った。怯んだが顔には出さなかった。彼は目だけをゆっくりと左右に動かし、兄と千尋も同様に見、静かに息を吐きながらペンを内ポケットにしまった。

父の死に事件性はない、という最初の見立てを、本田は結局変えなかった。正確な死因は詳しい検査で明らかになるだろうと言い残し、父の遺体を連れ、一時間ばかりで引き上げていった。

「お前らはどうだか知らんが、俺は自分の親父が嫌いだ」

子供の頃、千尋が泊まりに来た晩などによく、父はそう話した。小さな明かりを一つだけつけた子供部屋に、父のだみ声はよく馴染んだ。

「俺の親父には昔っからヒッピーじみたところがあって、家にわんさと連れてくる音楽仲間もまさにその類だった。ヒッピーじみた感じって、お前らわかるか。こうダルい感じの服を着て、手首にわさっとヘンプアクセサリーをつけてよ、生まれる前からの友達って感じに話しかけてくるんだ。調子どうだ、げーん？　ごきげんかよ、げーん？」

僕と千尋は二段ベッドの上段で、兄は下段でケラケラ笑い、げーん、げーん、と真似た。

「とにかくイラつく連中だよ」父はにやりと笑った。兄の勉強机に腰掛けた父の顔が――若い頃の喧嘩で折ったという左上の犬歯の、その黒くぽっかりと空いた穴が、ベッドの柵越しに見えた。「ミュージシャンってのはだいたいそうだ。愛と平和を信じてる。音楽は人と人とを繋ぐためのもんだと心の底から信じてるんだ。だから連中がげーんげーんと酒を飲み、煙草を吸い、べちゃべちゃと喋くったあとで始める演奏はいつだってゲロの臭いがした。自分で吐いた息を自分で吸って生きてる連中の音だ。俺はそういう中でギターを覚えた。とんでもねえ地獄にいるぞと、自分でちゃんと気付くまでな」

父の声から上っ調子がなくなっていくのに合わせ、僕らの笑いもおさまった。部屋の暗さま

で深まったのか、父の顔も、もう表情までは見取れなかった。「誰かが弦をはじいたらセッションの始まり」と、その暗さに見合う声で父は囁いた。「あの胸糞悪い文化のために、親父は辺鄙な場所に家を建て、俺と喬に音楽を教えた。愛と平和、夢、希望、生まれてきたことの喜び。親父がそう呼んで信じる、でも俺には毒でしかなかったものを、長年与えられて育った。奴はとうとう理解しなかったが、俺がギターを覚えたのは音楽を愛したからじゃない。俺のギターと親父のマンドリンは常に別の場所で鳴る。俺は音楽が嫌いだ。俺は家が嫌いだ。俺は親父が嫌いだ」

最後はどこか詩のように、言葉の繋がりがおぼろになるのが、僕らに眠りの時を告げた。

明かりを消すと、父は暗闇から手を伸ばしてきた。僕はその大きな手が頬に触れるが早いか指に噛みつき、それからすぐ、父が叩きやすいよう頭を差し出した。隣の千尋は僕らがたてる物音を笑い、自分は素直に撫でられた。下の段の兄はたぶん、胸の上に手を置かれるか、闇越しに無言のメッセージを受け取っていた。おやすみがわりに父はいつも、ぎくりとするほどの命令口調でこう言った。いい夢見ろよ。

その父が死んだ。窓から差し込む午前十一時の光を浴び、白濁した目には瞳孔がなく、萎んだ唇は内側に巻かれ、リビングの中央に仰向けに倒れた体はどこも乾ききっていた。

あんな姿をこれまで一度も見たことがないのになぜ父だとわかったのだろうと、叔父と兄が刑事たちを見送りに行き、千尋と二人だけになったリビングで、僕は発見時のことを思い出していた。誰も驚かず、ただ黙って、四人でしばらく父を取り囲んでいた。いつ死んでもおかしくない人間だという了承は父以下全員にもうずっと前からあったが、僕らにそう思わせた日頃の激しさ――誰彼構わず喧嘩をふっかける、興奮すると屋根からでも、走行中の車からでも飛び降りる――を思うと、予想外に静かな死だった。

そこで偶然、同時にふうとため息をつき、千尋と顔を見合わせた。いくらか血の気のないほかは、普段と別段変わりのないそばかす面だった。ただ少し頼りなげに、じっとこちらを見つめてくるのは、おそらく目下の振る舞いについて――しんみりすべきか、明るく笑うか――迷っているためだった。僕に合わせようという受け身の意思が見て取れ、同じ意思でもって僕は兄の姿を探したが、ちょうど叔父と一緒に玄関のほうから戻ってきた兄はしかしこちらには目もくれず、何やらぼそぼそ喋りながら隣の和室に入っていった。

「一人だったな」結局、千尋が先に口を開いた。「刑事ってのは、俺は、絶対に二人組なんだと思ってた」

「誰も組んでくれないんじゃねえか」僕が言うと、千尋は低く笑った。「それより、俺は全員

しょっ引かれるかと思った」
「ああ、俺もそう思った」
「なんでそうならなかったんだろう」
「満室なんじゃねえか」今度は僕が笑った。
それから千尋は寝起きのように伸びをして、さて、やるかあと大声を出した。それを聞いて僕はようやく、自分たちが長旅から帰ってきたばかりであることを思い出した。戻ったばかりの家では、休息より先に仕事が待っている。窓という窓を開け、埃を追い出さねばならない。布団を干し、家具や床を拭かねばならない。台所から虫を、換気扇から鳥を、ガレージから蝙蝠を追い払わねばならないのだ。
確認してみるまでもなく、父はそうした仕事にいっさい手を付けていなかった。帰ってから死ぬまでの三日間、必要最小限の範囲で小ぢんまりと生活していたようで、ポストの中の郵便物さえ取り出していなかった。しかし例年どおりのその作業に取りかかってみると、父の死によって一瞬、確実に硬直した時間が、再び巡り始めるのを感じて僕はたちまち調子が良くなった。今夜自分たちが眠るために、僕と千尋は景気よく家を起こし始めた。
《さあ船出だ　ヨーソロー》キャンピングカーから叔父のウッドベースを運び出しながら、僕

は歌った。《ヨーソロー　ヨーソロー》と先を行く千尋もすぐ乗って、それしか歌詞のないその歌を、僕らは延々歌い続けた――《さあ船出だ　ヨーソロー　ヨーソロー　ヨーソロー！》

ダイニングを通り、休暇中の練習場所になるリビングに入ると、おい玄さんを踏んでるぞと千尋が言った。父の死に場所は踏んではいけない、というルールがその一言でできあがったが、お前ら喪服なんて持ってたかと言いながら和室から出てきた叔父がまさにその場所で立ち止まったので、ああもう、あーあー、と僕らは笑った。

その笑い声の中、最初に楽器を手にしたのは兄だった。襖越しに聴いていたらしい『ヨーソロー』をフィドルでやりだし、「ビール出せ、ビール」と言った。そしてとうとう、周知のことではあるがどこか曖昧に揺れていた事実を、突き立てるように宣告した。「玄が死んだぞ！」

僕と千尋は歓声をあげた。車の冷蔵庫から運んできたばかりの小瓶を五本、カウンターに並べて栓を抜き、叔父に一本渡したほかは自分たちで持って打ち合わせた――玄さん、おめでとう！　それから兄に加わって、考え得る中でもっとも激しいやり方で『ヨーソロー』を荒らした。転がる車輪、賑やかし、僕と千尋のバンジョーの、それが元来の役割でもあった。

《さあ船出だ　ヨーソロー》僕と千尋は大声を張り上げた。《ごきげんかよ　げーん？》

兄は帰ってきてから初めて声に出して笑い、それでも決して弾くのをやめず、二頭立て馬車

の御者のように僕らを次の曲へ誘導した。飲む時間を作れ、ビールがぬるくなると僕らが文句を言うとますます嬉しそうにした。叔父はなかなか演奏に加わろうとしなかったが、夕方近くになると誰に相談することもなく特上の寿司を取り、それにつられてやっと楽器を手放した僕らに、また喪服の話をするかと思ったらこう言った。きのう完成した新曲を聴くか？

祖父が静かな月夜野の、この利根川沿いに家を求めた心そのものの晩だった。弦の音はいつまでも響き、歌声と、笑い声を絡げて遠く赤城山まで伸びた。一度も会ったことのない祖父を思うことを、父が憎むたびに不思議と募った親しみを、父にはもうどうすることもできないのだと思うと嬉しかった。

祖父の作った百弦（ひゃくげん）という名のストリングバンドは、本来は叔父に――叔父だけに――託されたものらしい。祖父は国内のブルーグラス界では名のあるフラットマンドリン奏者だったが、叔父はおそらくその祖父以上に音楽的才能に恵まれた人で、父の証言によると、音大に入る頃には弦楽器に限らずほとんどすべての楽器を演奏できたということだ。その後興味は作曲に向き、父曰く、「芸能業界というダークサイドで荒稼ぎすべく」歌手やアイドルグループに楽曲

を提供するようになったが、亡くなる直前の祖父からバンド相続の件を持ちかけられるとあっさり承諾したという。

「だって本業にする気はなかったからな」と叔父はそう言っていた。「親父は入院をきっかけに音楽事務所との契約を切ってたから、それならのんびりやれると思ったし、家や土地なんかよりそういう実体のない、曖昧なものを受け継ぐほうがおもしろいような気がしたんだよ」

そこに父が転がり込み、当然の顔でリーダーの座に就いた。不思議に思ったと叔父は言う。父がなんのあてもないまま十八で生家を出ていったのは、叔父の理解では、祖父と祖父の音楽から離れるためだった。根本から性質の違う二人が日々激しくぶつかり合うのを見て、そのほうがいいとも思った。以来、父は盆にも正月にも帰らず、病床の祖父に会いにも行かず、葬儀では喪主も名ばかり、会場裏で煙草ばかり吸っていた。だからその葬儀のあと、ヒッピーどもは締め出すぞと前置きもなく言い出したとき、バンドの話をしているのだと叔父はすぐにはわからなかった。

「この家も、百弦も宮嶋家のものだ」兄弟二人になってようやく見せた長男顔で、父は言った。

「もう二度と他人は入れない」

その得体の知れない、しかし強い意志により、当時三歳だった兄にまず楽器が与えられた。

兄は父が「フィドル」と呼ぶものがなぜ教室では「ヴァイオリン」と呼ばれるのか、練習に励みながらもおおいに悩み、自分の弾く楽器は一般にはヴァイオリンと呼ばれるが、カントリーやアイルランド音楽、ブルーグラスといったジャンルにおいてのみフィドルと呼ばれるという事実をどうにか飲み込んだあとでは、ヴァイオリンを弾くな、フィドルを弾けという父の要求に悩んだ。

僕が物心ついたとき、五つ年上の兄はちょうどこの問題に直面していた。僕の目に兄はすでにいっぱしのフィドル弾きに映ったが、お前のはヴァイオリンだ、フィドルの音を出せと父は言い続け、どっちも同じだと兄が歯向かうと容赦なくその横っ面を張った。一度手が出ると勢いがつき、父はしばらく折檻を続けたので、最初の一発が出るが早いかその場を逃げ出すのが僕の常だった。そうして押し入れの隙間から、大きく太い父の体と、その半分にも満たない兄の体が、触れ合っては音をたてて離れるさまを見ていた。胸の鼓動は恐ろしさより憧れを生んだ。それは年長者にのみ許された、高等な対話法に僕には見えた。

「同じじゃない。生まれが違うんだ」兄の体から抵抗の強張りがなくなるとようやく、父は手を止め、いきなり優しくなった声で講義を再開した。「血統が違う。血筋が違う。よその連中と俺たちみたいなもんだ。同じ人間でも、宮嶋の血が流れてるのは俺たちしかいない。それと

一緒で、フィドルにはフィドルの血筋ってもんがある」

そう言いながら抱き起こされ、フィドルの音を聴くか？　と問われると、朦朧としながら兄は頷き、やがて部屋には七十年も昔の、ブルーグラスの古典と言われる曲が流れた。音楽のジャンル名としては一風変わった、ブルーグラスという名の由来は叔父からざっくり教わっていたが――そもそもは牧草の名であり、その牧草のよく生えるケンタッキー州の愛称でもあり、ケンタッキー出身のストリングバンド、ブルーグラス・ボーイズの名がその後ジャンル名として定着したという三段構えの由来だった――しかし僕はどこまでも広がる草地の、その草の一本一本が空に向けて弦の音を響かせるイメージのみをその教えから得て、こうした古い曲や、祖父の遺した音源に触れるたび、その草地を思い浮かべては静かに胸をはずませた。いつかみんなでそこへ向かうことになるに違いなかった。そうでなければ父がこれほどこの音楽にこだわるはずも、兄が応えようとするはずも、襖を開け、プレーヤーの前で身を寄せ合う父と兄のあいだに割り込もうとねじ込んだ自分の指が、まだ触れたことのない弦を求めて疼くはずもなかった。

当時住んでいた目黒の安アパートは当然楽器演奏不可だったので、スタジオがわりになったのは、叔父と千尋が暮らす防音壁に囲まれたマンションだった。歩いて十五分ばかりの場所に

あったその広い部屋は、在宅仕事の叔父に兄と僕を預けておけるという点でも父には都合のいい場所だった。といっても、子供三人の世話はむしろサポートギタリストとしての単発仕事のほか別段することのなかった父が担うことのほうが多く、叔父が奥の部屋で仕事をしているあいだ、僕らは父から歌や皮肉や罵り言葉を教わった。甥という一歩遠い存在を気にしてか、千尋がいるときの父は普段より陽気で、叔父の家にはいつも笑いが絶えなかった。

僕と千尋にとうとう楽器がもたらされたときも、父はその陽気さを全身にまとっていた。八月を間近に控えた七月のある日、突如、父の上機嫌な声が響き、待ちに待ったそのときが訪れたのだった。「どこかに腕のいいバンジョー弾きはいねえか！」

兄はソファで読み耽っていた漫画から、僕と千尋はゲームを繋げたテレビから、それぞれ目を離して父を見た。外から帰って来たばかりの父は、薄いピンク色のシャツから汗と夏の匂いを熱く漂わせながらリビングに入ってきた。両手に一つずつ提げた洋梨型の楽器ケースは、大きな父に手を引かれた小さな双子のように見えた。

「百弦のメンバーを探してんだ」その双子の楽器を見つめる僕と千尋に、父は芝居がかった声色で言った。「なあ、どこかに腕のいいバンジョー弾きはいねえか」

心と体が、同時にぴょんと跳ね上がった。僕と千尋はコントローラーを投げ出し、ハイ、ハ

イ、と手を上げながら父に駆け寄った。このとき僕らはまだ小学校に入ったばかりだったが、兄は三つでフィドルを始めたと知っていたので、自分たちの遅れがずっと気になっていたのだった。

「ただし条件がある」としかし父はもったいぶり、楽器ケースを背の高い棚の上に載せた。「バンドに関する厳しい決まりごとについて、ここに詳しく書いてある。これによると――」もっともらしい手振りで父が胸ポケットから取り出した紙は、透けて見えたので確かだが、定食屋のレシートだった。「百弦が新しく募集するメンバーは、小学一年生の健康な男子であること、フィドル弾きの兄弟またはいとこがいること、家はどこだと聞かれたら百弦だと答えられること、宮嶋玄と、つまり俺と、血の繋がりがあること。どうだ、誰か――」

ハイハイハイハイ、俺ら俺ら、とそこでとうとう飛びついてきた僕らをおきあがりこぼしで遊ぶ手つきであしらい、やかましいチビはクビだぞと脅してから、「おい、お前どう思う」と父は兄に目をやった。「この二人、うちのバンドに入れていいと思うか?」

ソファの背もたれに頬杖をつき、愉快そうにこちらを見物していた兄は、僕と千尋の祈るような目に見つめられてクックッと笑い出した。「まあ、いいんじゃない……」

その意見を受け、父はようやく僕らを品定めし始めた。僕と千尋は一歩身を引き、姿勢を正

し、真剣そのものの顔で父を見上げた。
父はまず千尋の頭に手を載せ、厳かに尋ねた。「お前の家はどこだ」
「百弦だ」
すぐに答えた千尋の髪を、父は笑顔でかき回してやった。千尋は嬉しそうに目を閉じ、首をすくめたが、その手の主がもし叔父だったら千尋はほとんどなんの反応も示さないことを僕は知っていた——叔父はいつもシンセサイザーと機械を相手に黙々と仕事をしているだけだったので、邪悪な昔語りをしたり、突然こういうショーのようなことをやりだす父に千尋が夢中になったのは、ある程度仕方のないことだった。
父は棚の上に載せた楽器ケースのうち一つを下ろし、テーブルに置いた。ギターの弦をはじくように父の指が留め具を外すと、太鼓にネックをくっつけて弦を張ったような、見るからに愉快な楽器が現れ、僕と千尋はテーブルの縁に手をついてそれに見入った。よその家で一度、ベビーベッドで眠る赤ん坊を見せてもらったときのことを僕は思い出していた。
ケースから、それこそ赤ん坊のようにそっと取り上げた楽器を、父は千尋に差し出した。
「バンジョーはそばかす男のものだと、昔っから決まってる。これはお前のための楽器だ」
千尋はぎゅっと楽器を抱いた。腕の中のバンジョーを見、父を見、またバンジョーを見るそ

の瞳の、みるみる増していく輝きがそのまま僕の期待になった。何かを弾く者としての命が得られることを、振動と音韻と旋律を持つ者としてようやく生まれ出ることを、高鳴る鼓動とともに僕は悟った。

千尋と同じ目で見上げると、父も千尋にしたのと同じように、僕の頭に手を載せた。お前の家はどこだ。百弦だ。

棚から下ろされたもう一つの楽器ケースが開けられたところで、しかし、僕の期待はいきなり揺らいだ。そこにあったのは、千尋のものとは違ったのだった。

堂々たる八弦、片側だけ巻き上がったボディ——写真で見ていて知っていた。それは祖父の楽器だった。「フラットマンドリン」と父はその楽器を差し出した。「ブルーグラスの花形だ」

全身が冷たくなっていくのを感じながら、僕は手をうしろに回した。とても受け取れなかったが、その理由を言葉にする術もなかった。

厳密には、僕が恐れたのは楽器ではなく、父がそれを僕に与えようとしていることだった。毛嫌いしていた祖父のバンドを続けようとする父を不思議に思った、と叔父から聞かされるのは、十年以上あとになる。でもこのときの僕はその矛盾と、その矛盾の中に潜む父の不穏な本性に、たぶん、直感的に気付いていた。もし父が純粋に祖父や祖父の音楽を愛していたら、兄

にそれを学ばせるとき、殴ったりはしないはずだった。俺は親父が嫌いだと囁く声を、あれほど暗く沈ませもしないはずだった。父がなぜ憎悪の中で生きることを選んだのかはわからなかったが、祖父の楽器を受け取れば遅かれ早かれ自分も憎まれることになるということは、僕にもわかった。

楽器を受け取ろうとしない僕を見て、父が眉をひそめた。恐ろしいことをしようとしている自覚がないその様子に、僕は絶望に近い焦りをおぼえた。涙が出る前になんとかしなければと、縋る思いで千尋を見ると、バンジョーを抱いた千尋も不安げにこちらを見ていた。その表情の意味を、僕は即座に理解して、マンドリンはいやだと言うかわりにこう言った。「ちいとおんなじのがいい」

僕を見下ろす、父の目に炎が宿った。自分もいよいよ殴られるのだと、そう思ったらいっそ嬉しいような、兄と並べて誇らしいような気持ちになったが、それでも恐怖は消えなかった。「ちいとおんなじのがいい」と震えだした喉を押さえつけるため、大きな声で繰り返した。「だって俺たちコンビだし。ちいとおんなじのじゃなくちゃやだ」

父はしばらく黙っていたが、やがて、重い声で問い直した。「桂。お前の家はどこだ」

目を泳がせてから、僕は答えた。「百弦だ」

「マンドリンは百弦の心臓だ」抑え込むように囁いた。「桂、俺の言う意味がわかるか」
僕はきつく唇を噛み、涙を隠すために目を伏せた。わかると答えればマンドリンを弾かされ、わからないと答えれば殴られる、その狭間で、もう完全に身動きが取れなくなっていた。どちらからも逃れるには宮嶋の名を捨て、出ていくしかない、でも一人でどう生きていけばいいのだろうというところまで考えたとき、兄がふと口を開いた。「じゃあ玄さんが弾いたら」
父はゆっくり目を上げて、一番遠くにいる兄を見た。冷たい目だったが、「それとも俺が弾こうか」と兄は臆せずに続けた。「マンドリンが心臓なら、フィドルより大事だろ」
父は何も言わなかった。ただ兄を見ていた。そんなに長く父を見つめ続けることは考えるまでもなく危険行為だったが、兄も目をそらさなかった。緊張に耐えられなくなった千尋が咳とも咳払いとも違う、妙な音を漏らしたのをきっかけに、折れたとはっきりわかる引き方で父が目を伏せた。それからあらためて僕と向き合い、顔を覗き込むようにして言った。後悔しねえな？
このとき何が起きたのか、父がなぜ兄に負けたのか、何年ものあいだわからなかった。わかったのは巡業が始まって一、二年ほど経ったある晩、どうにも寝付けなかったその晩に、そもそも父はなぜ兄にマンドリンを与えなかったのだろうと考えたときだった。マンドリンといえ

ば祖父、という父には呪いに近かったであろうイメージを乗り越えるためにも、花形楽器であるというただそれ一点をとっても、父は誰より目をかけていた兄にこそその楽器を託すべきだった。

ではなぜそうならなかったのか。考えたこともなかったが、考えたら三秒で答えが出た。兄は生まれつき右手に欠損があり、といっても親指がないだけだったが、それでもマンドリンやバンジョーのような撥弦（はつげん）楽器を滑らかに弾くというのはおそらく現実的ではなかった。人差し指を下に差し込む兄の弓の持ち方も実は特殊で、親指を支えにするのが正式なのだとずいぶんあとになって知った。父は選んで兄にフィドルを与えたのではなかった。ほかに選択肢がなかったのだ。

単純な話だったが、それがわかった瞬間、じゃあ玄さんが弾いたら、それとも俺が弾こうかというあの日の言葉の真意にまで一気に理解の飛距離が伸びて、約十年後にあたるその晩、僕は当時まだほんの十一歳だった兄が心底恐ろしくなった。もしマンドリンが百弦にとってほかのどの楽器より重要だったとしても、兄は自分のフィドルとそれが差し替えられることはないとわかっていたし、祖父を象徴するその楽器を父には弾くことはできないと知ってもいた。自分と父自身の不可能を突きつけることで、兄は、僕の不可能を父に尊重させたのだ。

それを知った瞬間の衝撃、兄への恐れは、どこかに腕のいいバンジョー弾きはいねえか、から始まるあの夏の日を、そのまま再現する夢に姿を変えて繰り返し僕の夜を訪れた。父が倒れていた場所にギターケースを寝かせ、取り分けた寿司と、帰りしなにたまたま父の好きな銘柄を見かけて買っていた大吟醸を供えたその晩も、さんざん歌い騒いだあとでその夢を見た。

夢の中の光景は、しかし、いつもよりどこか漠として、まだゲームのコントローラーも離さないうちから僕は不安に襲われていた。そして、夢だと気付いたわけでもないのに、目に映る一つ一つを脳裏に刻んで世界と自分とを繋ぎ止めようとした——父の薄ピンク色のシャツ、上向きに輝く千尋の目、刃のように光るマンドリンの弦。